



ただいま、13歳

「いいね!」、(笑)、憧れの時代に育つというのは、こういうこと

ジェシカ・コントレラ

2016年5月25日公開

車に滑り込み、シートベルトを締める前だというのに、彼女の手の中のスマホは忙しない。中学2年生の1日を終えた13歳の少女。

彼女は「こんにちは」と言う。オペアが「準備はいい?」と尋ねる。

彼女は答えない。親指はインスタの上。バーバラ・ウォルターズのミームが画面に表示されている。スクロールすると、別のミームが表示される。更に別のミーム。そしてアプリを閉じる。BuzzFeedをオープン。フロリダ州知事のリック・スコットについての話がある。それをスクロールしてジャネット・ジャクソンについての話に、お次は「あなたがイギリス人とアメリカ人なら理解できる28のこと」にたどり着く。それを閉じる。インスタをオープン。NBAアプリをオープン。画面を閉じる。再びオン。Spotifyをオープン。Fitbitをオープン。7,427歩を確認。インスタを再びオープン。Snapchatをオープン。友達の口からキラキラと流れる虹を見る。YouTubeのスターがカメラに向かって膨れっ面をしているのを見る。ネイル・アートのチュートリアルを見る。車道の段差を感じて顔を上げる。家に到着。所要時間12分。



家族のステーション・ワゴンの前部シートに座っているのがキャサリン・ポメレニング。
2002 年生まれ。つまり、Z 世代と呼ばれている一員だ。

キャサリン・ポメレニングのスマホは、友達みんながいつも屯っている場所である。だから、彼女もそこにいる。朝にスマホが鳴って、目が覚めると、もうスマホ漬けだ。学校にいるときも、こっそりスマホを使うことができる。8 歳の妹、ライラがビーズで工芸品を作っているときも、スマホに夢中。スマホをやめるのは、バスケットボールをするとき、スケートボードをするとき、PG-13 指定のコメディを見るとき、たまに夕食を食べるときだ。だけど、再びスマホを取り上げると、64 件の未読メッセージが入っているかもしれない。

現在、彼女はバージニア州マククリーンにある大きな家のリビング・ルームでスマホを使いながら、現在 13 歳であることがどんな感じか説明する。

「”いいね!”が 100 を超えると気分がいいわ。あとはコメントね。冗談を言ったり、誰かをタグ付けするためにコメントするだけよ」

一番のお気に入りには小さな通知ボックス。誰かがインスタで彼女に”いいね!”、タグ付け、フォローしたことを意味するからだ。彼女には 604 人のフォロワーがいる。投稿したものは殆ど削除するため、彼女のページには 25 枚の写真しかない。十分な”いいね!”が得られない、照明が充分でない、彼女の人生の最もクールな瞬間を映していない投稿は削除しないとけない。

「映える写真を決めるの」と彼女は言う。「友達と一緒にいる写真とか、本当の映え写真とか」

どこかで、もしかしたらこの瞬間にも、神経科医は、キャサリンと同年代、つまり Z 世代として知られている人たちの発育途中の脳に、このようなスマホを眺めている時間が何をもたらしているのか理解しようとしている。教育者は、Google ではすべての答えは分からないと、彼らに教えようとしている。カウンセラーは、[インターネット中毒](#)から彼らを救い出そうとしている。両親は、フェイスブック(追記、[フェイスブックは廃れている](#)のだが)で子

供たちと友達になることで遅れまいとしている。社会学者、広告主、株式市場アナリスト…。スクリーンに釘づけになって生まれた世代が顔を上げて、世界と交流しなければならなくなったとき、何が起こるかを誰もが知りたいと思っている。



家で Xbox をプレイ中のキャサリン(左上)、キッチンでオペアのレイチェルと 8 歳の妹のライラと一緒に(右上)、外でスケートボードを持っているところ(下)、キャサリンは小学 5 年生で初めてスマホを手にした。

今も、キャサリンは下を向いたままだ。

「この子を見て」と彼女は言う。「この子の写真には、たくさんの”いいね!”があるけど、それはね、『tbh がほしければ、私の写真に”いいね!”してね。終わったらコメントもよろしく』って書いて、9 枚以上の写真を投稿しているからよ。だから、みんな、この子の写真に”いいね!”をするし、みんなにはシンプルな tbh をお返しするの」

tbh は褒め言葉だ。「マジで」または「ぶっちゃけ」の略である。

キャサリンは、長くて茶色の髪を肩の後ろに振り払い、外に出せと吠えている黒いラブラド

ールのルーシーを無視する。

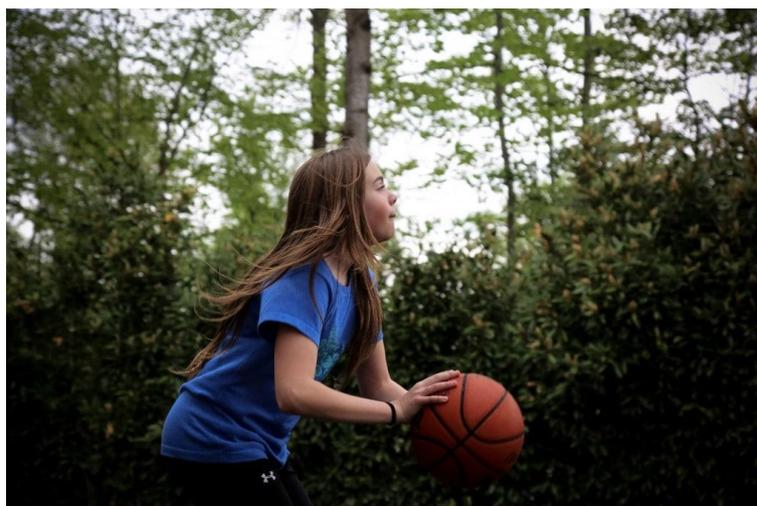
「それって、あなたはいい人だ、ってことを宣伝しているようなものよ。誰かが『マジで、君は素敵で可愛いよ』って言おうと思えば、こういう”いいね!”が、そのコメントの中にあるあなたを認めただってことになるの。そうするとね、それを見た人たちも、『なるほど、この子は素敵で可愛いや』って言うことができるってわけ」

tbh、キャサリンは素敵だし可愛らしい。彼女は中学生のような頬と、高校生並みの語彙を持っている。薄茶色の目を持ち、他校の男子の子がいるダンスのときだけメイクする。家族は比較的裕福で、悲しいことにも遭遇してきた。身長は5フィート1インチだが、あつという間に背が伸びるだろう。彼女が「お願いだから、やめて」と言った後だというのに、思春期についてのぎこちない会話の中で、父親のデイヴはそうのように言ったのだ。彼女は、コンバースの靴がどうして恰好よくなったのか分からなかったが、実際にはそうってしまったので、殆どのその靴を履いている。私立学校では、着心地の悪いドレス・パンツを着ないといけませんが、それを除けば黒いレギンスも着用している。

学校は彼女が活躍する場所だ。彼女は教師に慕われているし、まもなく、中学2年生の出し物であるミュージカル”ライオンキング”で若きシンバを演ずることにもなっていて、成績はAばかり。学校は彼女にとって十分にやりがいのある数学コースを提供していないので、ジョンズ・ホプキンス大学を通じてオンラインで代数の上位クラスを受講している。

いま、彼女は自分のページで、友人のアイシャの誕生日のために投稿したアイシャの写真の下にあるコメントを確認している。

「ハッピー・バースデーの投稿は、かなり大きな問題なの」と彼女は言う。「そのページに自分のことを載せようと気にかけているのは誰かって分かっちゃうから」



キャサリンは彼女のバスケットボール・チームのポイント・ガードだ。

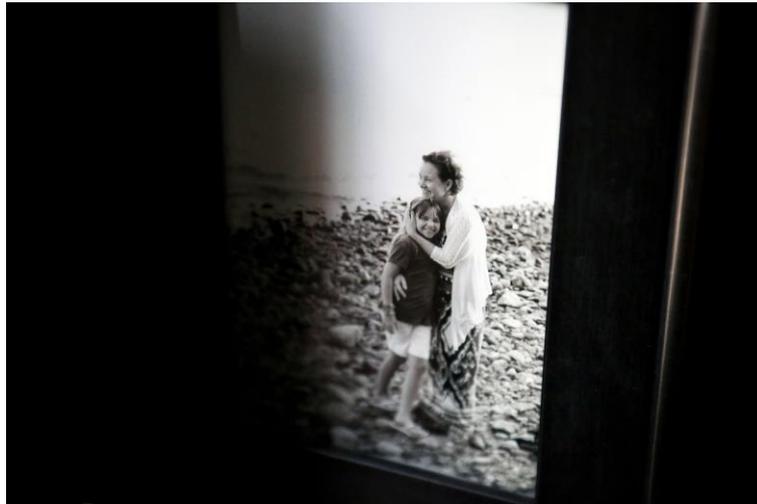
キャサリンのオペアであるレイチェルが部屋に入ってきて、バスケットボールの練習の準

備をする時間だと告げる。キャサリンは頷き、高速振り子のように親指を動かして、更に数回スクロールする。階段を登り、コバルト・ブルーに塗られた自分の部屋に向かいながら、NCAA バスケットボールの試合の Vine —6 秒間のビデオ・クリップ— を観る。青は彼女のお気に入りの色だ。彼女は”私たち”という言い方でお気に入りの殆どを説明する。つまり、そういったお気に入り —ジェニファー・ローレンス、ジジ・ハディッド、スプライト、チーズだけでできたチポトレのケサディージャ— は、彼女も、そして彼女の友達も承認しているということだ。

床には衣服がもつれ合っていて、ベッドはコードがもつれ合っている。1 つはスマホ用、1 つは iPod 用、1 つは学校のノート PC 用、もう 1 つは母親のアリシアがかつて所持していたノート PC 用である。

アリシアの名前が書かれたピンクの毛布が布団にかかっている。結婚式の日撮った母親の白黒写真が、彼女の机の上に飾られている。ナイトスタンドの上の額縁の中には、母の日と一緒に作成した手形のアート。現在、キャサリンの手形は、母親とほぼ同じ大きさだ。キャサリンが生まれてすぐ、乳癌が発症した。一度、寛解したが、キャサリンが小学 3 年生のときに再発した。小学 5 年生のとき、事態が悪化した場合に備えて、アリシアとデイヴはキャサリンに携帯電話を買い与えた。クラスでも、最初に所有した生徒の一人になった。彼女は Snapchat、インスタ、Twitter、VSCO に登録した。母親が病気で家にいたので、友達を家に招待するのはやめた。

昨年、3 月の曇りの木曜日、アリシアは亡くなった。キャサリンは、いつでも、そのことについて触れようとはしない。母親の死を口にしないということは、家が静かで、考えが込み込んでくる場合を除いて、母親の死について考える必要がないということだ。どう感じているか、友達にも話さない。そのことについて訊かれると、顔をしわくちゃにして落胆する。背中を丸め、目には涙を浮かべるが、それが頬に流れることはない。もし、彼女がこの文章を読んでいたら、「お願い、スマホの話に戻って」と言うだろう。



ポメレニングのリビング・ルームに飾られている、キャサリンと母親のアリシアの写真。アリシアは、キャサリンが中学1年生だった2015年3月に、乳癌との長い戦いの末に亡くなった。

ライラはタップ・シューズを見つけることができず、レイチェルは病気だし、犬は朝食を待っている。キャサリンはガレージに直行している。

「何か食べた方がいいんじゃないか？」父親が、キャビネットを漁りながら尋ねる。「朝食用のバーは？」

キャサリンは、パステル・ピンクのスマホ・ケースを手にしたまま、腕を組む。

「その前に、何か食べた方がいいような気がするけど？」

「私は元気よ」と彼女は言う。

ライラが階段を降りてきて、ショート・パンツを履きながら、「寒い」と不平を言う。

「外は45°Fだよ」と父親は言う。「そんな日に、ショート・パンツを履くのは、いい考えだと思う？」

彼はキャサリンの方に戻るが、彼女はすでに家のどこかに行ってしまう、何かをしている模様。彼には、彼女がスマホで何をしているのか分からない。

デイヴ・ポメレニングは、彼女に[スマホをあまり使わせない](#)方法を見つけないかと思っている。1ヶ月で、彼女は18GBのデータを使い果たした。殆どの大容量プランは最大で10GBだ。彼は口を挟んで、4GBに制限した。

「あまり邪魔したくはないんですよ」と彼は言う。「この状況をどうやって理解するか。これは、私なりの立場から答えを見つけないといけない問題です」

彼は、何度もそう繰り返す。デイヴは56歳の顧問弁護士だが、フェイスブックのページに写真をアップロードする方法も分からない。13歳のときには、僅か2マイル離れたところに住んでいた。当然、携帯電話なんか持っていなかったし、家庭用の電話も大人のものだった。友達と話をしたければ、自転車に乗って友達の家に行った。両親は、彼が一日中、外で

遊んで、夕食時に戻ってくることを期待していた。

キャサリンの親友の中には、彼女の家にも一度も来たことがない親友もいるし、キャサリンが自宅に遊びに行ったことのない親友もいる。デイヴからすれば、彼らは滅多に外で遊ぶことがないように見えるが、彼女からすれば、自分たちはいつも一緒にいるように思っている、ということを知っている。彼は、キャサリンが親友に送っているもの ― 家族でスキーに行った写真、猫のボートの写真 ― を見ようとするが、彼女の友人、または彼女がフォローしている人たちが何を送り返しているのか、見当もつかない。

彼は電話代をチェックして、キャサリンが誰に電話をかけ、どれだけテキスト・メッセージを送ったか確認するが、彼女は殆ど誰にも電話をかけておらず、メッセージが消えてしまう Snapchat を介して、たいていはチャットしている。別の父親は、ペアレンタル・コントロールを使って、キャサリンが夜中にスマホを使えないようにすることをデイヴに勧めた。彼はその設定を行ったが、その途端、その設定を解除しなければならない何らかの理由があるように思えてきた。

彼は、キャサリンが2つのバックパック ― 1つは教科書用で、もう1つはノート PC 用 ― を持って車の中で待っているのに気が付く。

「どんなジャケットを着るつもり？」彼は尋ねる。

「セーターを取りに行ってくる」と彼女は言うが、あたかも、彼が尋ねるよりも前に、すでにこの行動計画を持っていたかのようなのだ。彼女はスマホを手にも家に帰り、詮索好きな目からスマホを守ろうとする。

父親が彼女のアプリを覗き見しようとしても、10代の女の子が経験する人生の本当のドラマなんか、コメントには書かれていない。

あちらこちらで“いいね!”していたら、キャサリンの友達が、嫌いな女の子のインスタの写真についている“いいね!”を全部解除するだめだけに、彼女のスマホを借りたとして。キャサリンは、そうされた女の子のページに戻って、その写真に再び“いいね!”することはできない。なぜなら、それはストーカー行為に当たり、禁止されているからだ。



(左)家の近くの公園でのデイヴとキャサリン(右)自作の工芸品の中に立っている 8 歳のライラ。デイヴの育った場所は、子供を育てているところから僅か 2 マイルしか離れていないが、テクノロジーは、娘たちと自分の子供時代で雲泥の差がある。

或いは、先週、中学生のダンス・パーティーがあって、彼女の友達が 10 人の男の子と電話番号を交換したが、そのうちの 5 人は中学 1 年生だったため、その電話番号を削除しなければならなかった。更に、Snapchat に男の子たちを追加登録する前に、彼女は自分のユーザー名を変更しなければならぬことに気が付いた。なぜなら、それは子供の頃のニックネームで、かなり恥ずかしいことだったからだ。

しかし、ユーザー名を変更したため、Snapchat のスコアは 0 に戻ってしまった。このアプリは、スナップを送受信するごとに約 1 ポイントを付与する。しかも、Snapchat のスコアが低いと、まったくもって恥ずかしく、ストレスが溜まる。そのため、ある日、彼女は 1,000 ポイントを獲得できるほどのスナップを送信した。

Snapchat はいちゃつく場所だ。キャサリンは、男の子に裸の写真を送った友達を一人も知らないが、そういうことをすれば恰好いい男の子に会えることを知っている年上の女の子には、よくあることだということを知っている。

父親が彼女のスマホから何も見つけることができなかったということは、キャサリンが数学、バスケットボール、歌を得意としているのと同じくらい、スマホをもっと上手く使いこなしたいと思っていることの表れである。何を投稿するか、どうキャプションを付けるか、いつ”いいね!”するか、何をコメントするかを知っている女の子の一人になりたいのだ。

彼女は紺色のセーターを着て車に戻る。デイヴにとっては、小さな育児の勝利。彼は、Snapchat が何であるかを理解する必要がある。ワシントンの弁護士と片親になる方法も。そして、子供たちに朝食を食べさせ、髪を梳かせ、時間どおりに学校に行かせる方法も。彼は車の衛星ラジオをクリックし、チャンネルを”60s on 6”から、キャサリンとライラが好きだと彼が思っている放送局の番組”Hits 1”に切り替える。ジャスティン・ビーバーが演奏中だ。彼は、私道から出て助手席をちらりと見る。キャサリンは、ヘッドホンをつけたまま、

窓の外を見ている。



宿題をするキャサリン。中学 2 年生のクラスは全員、メモや宿題にアクセスできるオンライン・ホームページを持っている。

ある日の午後、キャサリンは誤ってスマホを父親の車の中に置き忘れてしまう。宿題をしている間は、スマホは必要ないはずだが、U字型のソファに座っている彼女の隣にスマホがないことを一瞬忘れて、手を伸ばしてしまう。

彼女の足は、コーヒー・テーブルの上に投げ出され、母親の古い MacBook はお腹の上にある。彼女は、選択した話題に関する 12 ページのエッセイとプレゼンからなる最高のプロジェクトに取り組み中だ。今年の初めに、彼女は”フォトショップとメディア” 一雑誌で女性がどのように描かれているかに関する調査一 をテーマに選んだ。

彼女は Google に”Chrome アイコンを変更する方法”と入力する。必要なものは数秒で見つかる。アイコンがピンクに変わる。彼女はエッセイに戻り、クラスメートの前で行うパワポのプレゼンに 1 行をコピーする。

Photoshop は、6 歳から 40 歳を越す女性まで、あらゆる年齢層の女性に影響を与えている。彼女の母親は、かつて家の中にピープル誌を置いていたが、今では彼女の名前が残っている迷惑メールしかない。

キャサリンは、コンピューターで完璧になった女性を見るのに、雑誌や看板を必要としない。そういう女性たちは、スマホを見れば、彼女のごく普通の友達の写真の間に、いつだっているのだ。アイシャがいて、ケンダル・ジェンナーのお尻があって、オリビアがいて、ランジェリーを着た YouTube のスターであるジェナ・マーブルスがいる。

全世界はキャサリンの指先にあり、そんな状況が何年も続いている。自分が 13 歳であるとまるで感じないのは、このせいだ、とキャサリンはある日、持論を展開する。彼女はたぶん 16 歳だ。

「もう子供だとは思ってないわ」と彼女は言う。「子供っぽいことは何もしてないしね。小学6年生の終わりに」 —彼女の友達みんながスマホを手に入れ、Snapchat、インスタ、Twitterをダウンロードしたとき— 「普段やっていたことを、全部やめちゃった。休憩時間にゲームをすとか、おもちゃで遊ぶとか、全部おしまい」
彼女のスクーターは、ほこりを被ってガレージに置かれていた。ぬいぐるみはライラにあげた。裏庭の木造の遊び場には誰もいない。スケートボードにネオン・イエローのホイールを付けたままにしているのは、スケートボードに乗るのが、まだ友達の間でクールな遊びだからだ。



「もう子供だとは思ってないわ」とキャサリンは言う。「子供っぽいことは何もしてないしね。小学6年生の終わりに」 —彼女の友達みんながスマホを手に入れ、Snapchat、インスタ、Twitterをダウンロードしたとき— 「普段やっていたことを、全部やめちゃった。休憩時間にゲームをすとか、おもちゃで遊ぶとか、全部おしまい」

キャサリンはエッセイからインスタに切り替え、新しいタブで開く。そこには、キャサリンの高校に通うことになる女の子が、プールからあがっている写真がある。駐車場の上の雲の写真。照明が不十分な自撮り写真。彼女はエッセイに戻る。そこには、女性の非現実的な肖像がどうして10代の摂食障害に繋がるかに関するセクションがある。

痩せていなければ、魅力的ではない

痩せていることは、健康であることよりも重要なのだ

汝、罪を感じずに食べる莫れ

彼女は拒食症を促すブログでその言葉を見つけた。そのページは、ガリガリに痩せた女の子の写真と、自分で食べるのをやめるためのヒントでいっぱいだった。キャサリンが探しに行こうと思えば、過食症、自傷行為、[自殺](#) —過去にトラウマを経験した10代の若者の場合に、より顕著に見られる危険な行動のすべて— を勧める[このようなサイト](#)を見つけるこ

とができるのだ。彼女は、スマホでその手のブログをスクロールすることができるが、その様子は BuzzFeed の記事を読んでいるときと何ら変わらなかった。

振り返ってみれば、あなたは、先生と両親があなたについて話していることなら何でも耳にしていたはずだ。「とても大人だね」、「お利巧さんだね」、「14歳の次は45歳だね」そして、君は「多くの可能性」を持っているよ。失礼だが、そういう言葉であなたが苦しんだことがあるだろうか?絶対にないだろう!

彼女は、ブログから数行をコピーして、プレゼンに貼り付ける。彼女はダイエットの経験は一度もない。しかし、どういうわけか、このブログを初めて目にしたとき、それが頭から離れなかったと彼女は言う。

14歳の誕生日の朝、キャサリンはスマホのアラーム音で目が覚める。午前6時30分。寝返りをして、暗闇の中でアラーム音を止める。

彼女の祖父母は、彼女の10代の最初の年の終わりを祝うためにここにいる、ホールの下の客室で眠っている。犬が餌を待ちながら、足を引きずって階下の広葉樹を横切る音を聞くことができる。

ピース・サインで覆われた枕の上に自分を支えながら、インスタを開く。後で、ライラがスタバのギフト・カードをプレゼントしてくれるだろう。父親は、彼女のクラスにドーナツを届けるだろう。祖父母は、夕食を食べに Melting Pot に連れて行ってってくれるだろう。しかし、まず彼女の友達が、誕生日のためにキャサリンの写真を投稿するかどうか決めるだろう。キャサリンの写真を自分のページに載せるくらい彼女のことを好きかどうか。投稿されれば、それらの写真は”いいね!”、そしてひょっとしたら tbh をもらえるだろう。

そういった写真は今朝、今すぐにでも投稿されるべきなのだ。彼女は、ビーチでビキニを着てポーズをとっている友達をスクロールしてやりすぎず。次はケンダル・ジェンナーが投稿した写真。コーヒーと一緒に自撮り写真。バスケットボールの Vine。女の子の舌を出した自撮り写真。スクロールして、彼女は待つ。その小さな通知ボックスが表示されるのを。

